

郷土を愛する人々の雑誌

# 神戸っ子

7月号

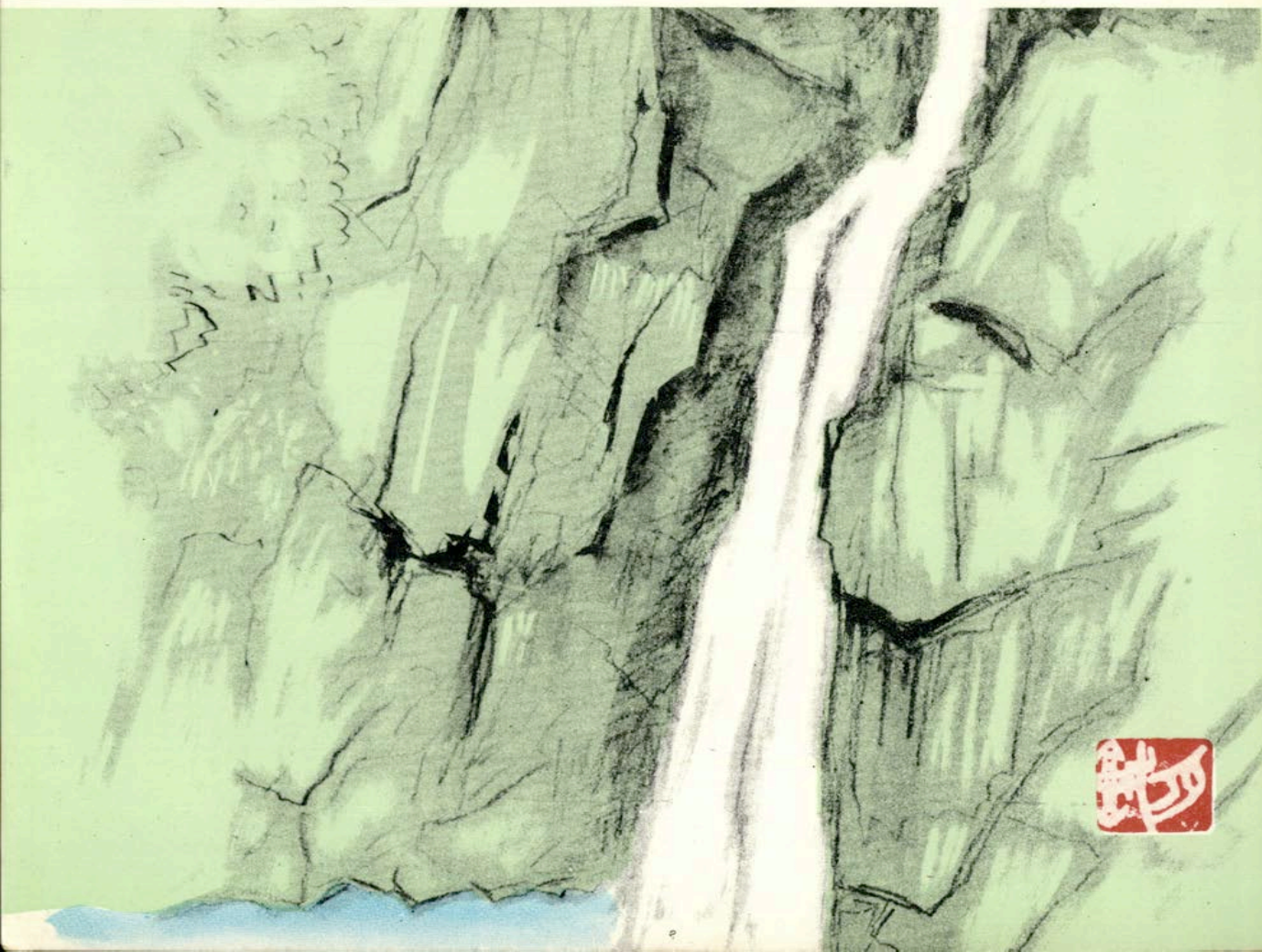
MONTHLY

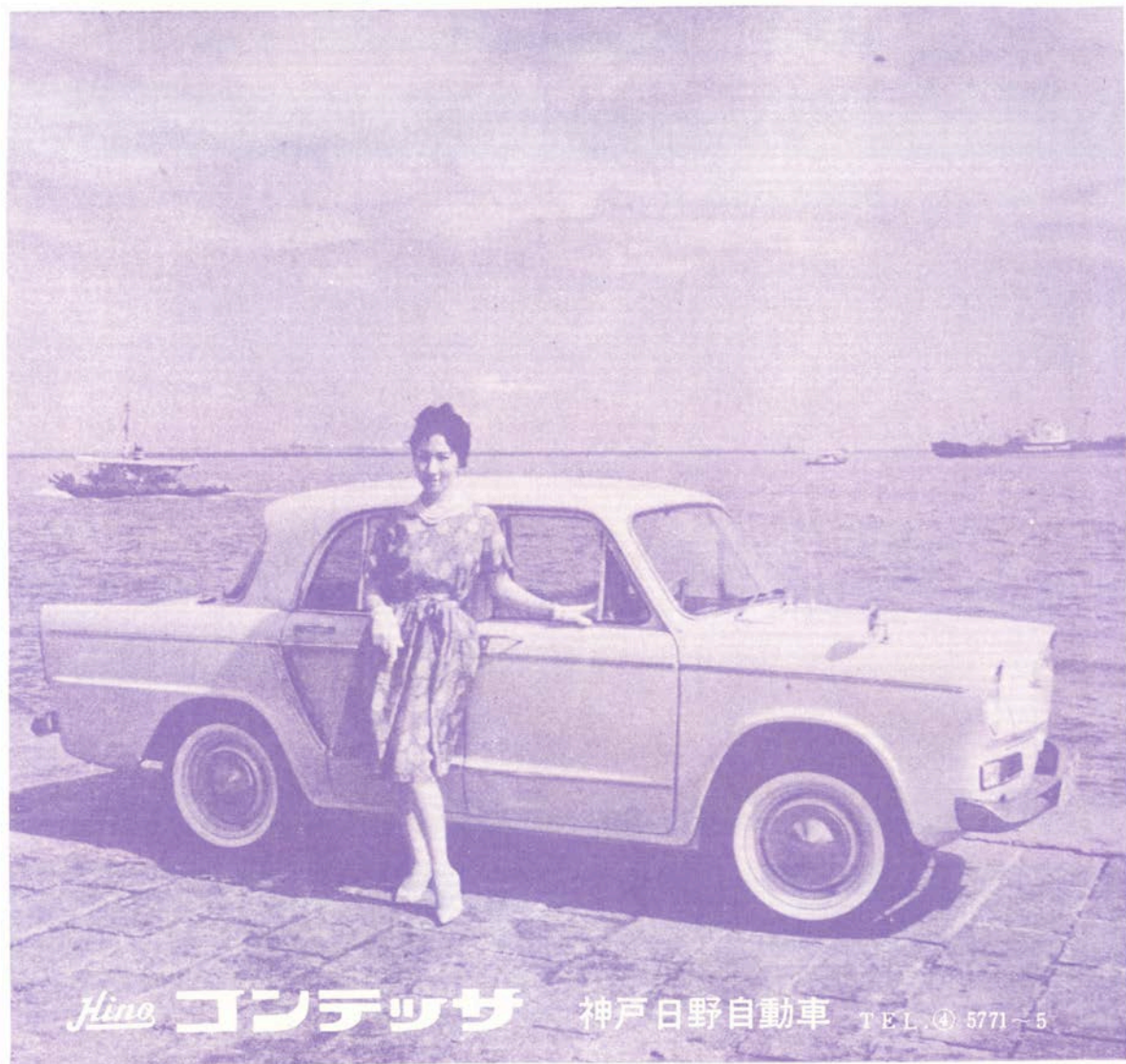
MAGAZINE

KOBEKKO

JUNE 1961

NO. 5





*Hino* **ゴンテッサ**

神戸日野自動車 TEL. (4) 5771-5



これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です







Mikimoto Pearls



優雅な装いに…  
ミキモトパール



御木本真珠店

神戸店・神戸国際会館内 Tel. 2-0062  
大阪店・新大阪ビルヂング内 Tel. 36-0220  
本店・東京銀座四丁目 Tel. 535-4611

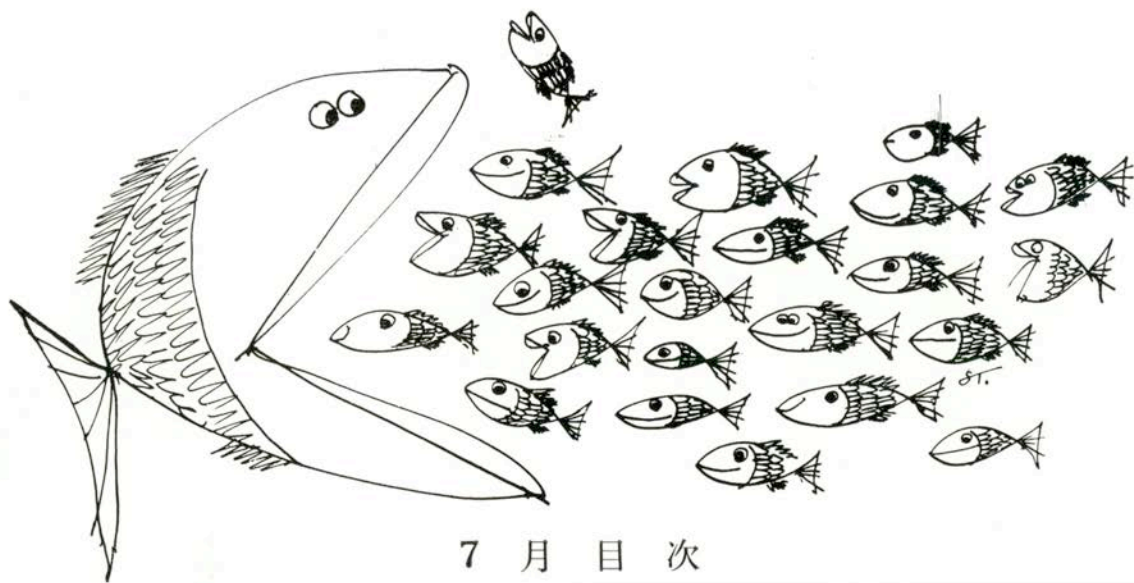
世界中の人からほめられた  
日本の誇り 神戸のほまれ

# マロングラツセは ヒロタの銘菓

お中元の贈物に一番喜ばれます  
特に東京送りによく使われています

元町通三丁目 TEL ③二三四〇番





## 7 月 目 次

PHOTO / 神戸の女性・衣川宏	1	25 写真特集 / 神戸の学園・神戸高校をたずねて
れんさい随想 / 旅ざんまい・阪本勝	5	28 涼を求めて / 須磨浦公園・有馬
神戸っ子放談・小曾根真造	8	32 リゾートの街神戸・福富芳美
須磨の浦・森月城	11	34 KOBEEKO SHOPPING GUIDE
随想 / 涼・岡部伊都子	12	40 うまいものシリーズ No.5 神戸の洋菓子あれこれ
旅の効用・辻久子	15	43 洋酒はなしのタネ No. 4
氷室のこと・野中春水	16	44 BONSOIR MADAME
連載④「ここに神戸がある」		46 一店紹介・千秋堂
六甲山・司馬遼太郎	18	47 連載小説第4回「波止場」・細野耕三
花時計・レリーフ / 松井高男・伊藤誠	22	51 THE SECOND COVER

表紙 / 森月城・カット / 中西勝・写真 / 米田昌弘・米田定蔵・デザイン / 橋昭三



あなたを飾る海の宝石!



北村パール

北村眞珠株式會社

神戸／元町2・東京／スキヤ橋センター  
TEL ③ 0072 (571) 8032

舶来婦人服地卸小売  
高級婦人服地



マルゼン

神戸市生田区三宮町1丁目(生田筋)  
TEL. ③ 0212・5454



# 旅ざんまい

阪本 勝  
え 中西 勝

「旅ざんまい」といったようなテーマで何か一筆というご注文だ。

旅ざんまい？旅ザンマイ？はてな、旅ザンマイ…色ざんまい、酒ざんまい、念仏ざんまい…ざんまい（三昧）とはおそらく仏教から出たことばだろうが、まあ若山牧水なんていう歌人を旅ざんまいの行者とでもいうのかななどと考えていると、芦屋の詩人、吉沢独陽から電話がかかってきた。

東京から永井叔がやってきたから、これから行く、在宅していてくれとの連絡だ。ある日曜日の朝の話。

そこでハタと膝をうった。永井叔とは、人も知るかの「青空の詩人」だ。マンドリンを弾きながら全国を放浪して歩く自然詩人。

いままで二、三度会ったことがあるが、この奇人などがまさしく旅ざんまいの行者とでもいうべき人物なんだろうと気がついた。また、失礼ながら、美しく健全な意味で、富田碎花さんなども、そのひとりであるかも知れない。





さて、わたしの場合だが、旅さんまいの半生を徑てきたともいえないだろうが、一般の人にくらべれば、国際的にも、国内的にも、ずいぶん旅をした方だと思う。

去年買った大きな地球儀に曾遊の地を朱線でつないでみて、相当のボヘミアンであることにいまさらながら感心した。この夏もまた外国に出かけるから朱線はさらに増えるだろう。

始めて世界をまわったのは、旅客機などのまだなかった三十歳のころだったが、公園のベンチで夜を明かしたり、警察に保護されたり、黒人の家に遊びに行ったり、思う存分放浪の楽しさもさびしさも味わったものだ。

あのとときの経験にくらべれば、旅客機で都市から都市、つまり点から点へ飛びまわる当今の旅行なんて、てんでおもしろくない。

大学時代には北海道の旅役者の群れに加わって、雪の曠野を放浪した。そのときの体験を小説化したのが、サンデー毎日に出たわたしの処女作「ピエロと女」で、二十四歳のときの作品である。

おやちに見つかって「コラ、まさるノおまえこんなことほんまにやったんかノ」とどなられた。

植物性、固着性の生きかたは、わたしの性にあわないようだ。またいわゆる立身出世型の人物にも親しみが持てない。生命力の振幅がせまいからだ。

わたしは人生そのものを旅と心得る。保険会社や証券会社の社員のような生きかたはいやだ。

雲に誘われ、風に吹かれ、月に慕い、花を惜しんで、ついには終るいのちじゃないか。何をくよくよ川ばたやなぎ、千金の春宵すなわち半壺の濁酒を傾け、山峡の雪夜すなわち炉辺に艶書を読むべし。

かならずしも海外の旅にあこがれる要はない。

じじつそれは誰れにでも恵まれる幸運ではない。それよりもまず日本を見なおせと、わたしはいいたい。

日本は決して狭くはない。思ったより広い国なのだ。ギリシヤなんか、北海道と四国をあわせたくらいだし、



イタリアだって本州と北海道を合したほどの長靴だ。オランダにいたっては九州よりちよつと大きい程度。しかもオランダ中でいちばん高い地点が、海抜わずか五メートル。(カイバツときいてあきれるノ) 日本アルプスやフジヤマのある日本と比べて見たまえ。

ドイツには南の海がないし、スイス、オーストリア、チエコは、山梨県のように海を知らない。

それに比べて日本はどうだ。敗れたりといえども、さい果ての北国から南端九州まで四辺海に囲こまれ、山河の恵み、春秋のさちたぐい稀れというべきではないか。この国に生をうけたものは、一歩も国外に出でずして、生涯を旅さんまいに生きていることができるのだ。

幸福をわがものとする豊かな情操と、ひろびろとした気がまえさえあれば、鞆とリュックのなかに天国をつめこんで、祖国のさちを満喫することはいとやさしい。

寒流あり、暖流あり、北海のサクとタラ、油壺の熱帯魚、九州の亜熱帯植物、火山、温泉、砂漠、そして何よりも千何百年の歴史の跡。旅情と感傷の苗圃は、きわまりなく豊富だ。

必要なのは自由な心とすなおな感受性だ。

とざされた団地の一室でも、われわれは旅さんまいにふけることができる。

みだりに空を飛ぶな。海外を夢みるな。

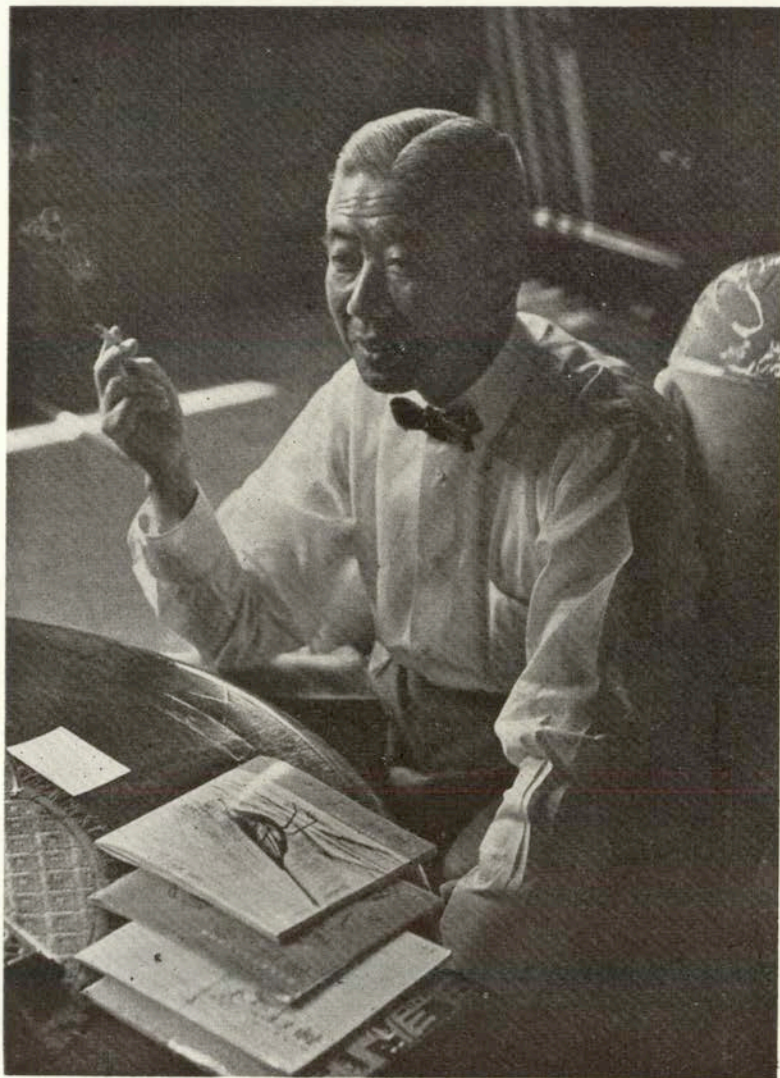
マネービルにこりかたまつた心の鬱血を揉みほぐらかして、あらためて祖国の水と花を見なおしてみようではないか。どうせ人間は一回よりこの世に生きられない。死と税金ほど確かなものはない。

死は永遠である。

幸福の盃は飲めるときに飲むべきだ。ウラニユムの鉞脈より、心の鉞脈を掘りあてようではないか。

自由に、豊かに、おおらかに、のびのびと、いのちの晩秋において、旅情と旅愁をふかぶかと思出のうちに味わえる生涯、わたしはそんな一生を生きたいと思う。





神戸っ子放談

神戸の繁栄のために

小曾根 真 造

(写真・神戸っ子を手に語る小曾根氏)

渋く、日焼けしていて、柔かい人柄は、多くを語らなくとも、神戸にも対する愛情の深さがうかがわれる、頼もしい貫録の人である。

特に手にした事業は最後までつきつめようというのがこの小曾根氏のバック・ボーンであり、信条なのだと感じた。

「小曾根さんという人はいったい、なに屋さんなんだ」といわれる程、郷土のためならなんでも頑張るといふ神戸にとっては、ほんとうに有難い存在で、また人々によく知られている、因なのでもあろう。

## 代々の養老事業

私などがとても養老事業などはおこがましいことなんです。先々代の時代から引き継いでいる小曾根家の事業が、養老院であり、孤児、母子寮などの救護事業なのです。

明治二十年の頃に祖父が始めたものらしいが、なんとも大変な事業なんです。

もちろん、現在の社会情勢では、困窮される人々が多くなっても少なうはないと思います。

それに市の施設といっても、ほんとうに不十分なもので、わずかに一カ所しかないという現状なんです。

私どもの事業は実際には、こういった社会悪のまんえんを防ぐ仕事の一環になっっている訳なんだが、私としていえることは、先ず第一に、この事業が進めて行けるのは、薄給にもかかわらずこういった、社会事業に、蔭の力となって努力して下さる職員の人々の、献身的な熱意とその力添えによるものなのです。

私も、人ごとに、また事あるごとに、お願いもするのですが、なかなか、いざとなると出来る事ではないのです。例えば、花隈おどりの切符を一〇枚ばかり贈られて早速、お年寄りの人々に差上げたところ随分喜こんでくれましたね。わずかな厚意がどれ程年とった人の慰めになるか想像もつかない程なんです。

また、いろいろ考えて、オリエンタルホテルあたりで少し不良品になった皿などは、こんな施設に早速に廻わしてもらってるんです……。

流石に神戸人の由緒のある人らしく、神戸の隅々までそれも、神戸っ子らしい温かい思いやりのあるところは、この人の持ち前とはいえ、にじむ神戸人の年輪のようなものが感じられ、円い説得力には、風格が見られる。

## ロータリー大会で広報委員長

先日のロータリー世界大会では、朝日、毎日、神戸、NHKなど報道関係の各社のロータリアンと一諸に広報

関係を担当、広報委員長ということになりましたね。各社の、ロータリー関係記事を大童でスクラップして大会当日に全部、切抜したものを、それぞれ分類しながら、展示して注目され喜こんでもらいましたよ。

ロータリー大会で、愉快だったのは、欧米では職業に準儀職というのがあるんですね。それで社会的な地位も随分と高いらしいんです。ところが、ご存知のように日本にはそんな、職業がランクされていないので、この接待に皆んなあわてたらしいんです。

質問の応答にも事欠くようなことだったんだとききましたよ。

## 神戸のための言葉

商工会議所でも一番重視して、取組んでいるのは、道路問題なんです。なんといっても道路がこれからの都市の盛衰のカギになるでしょうから、

県、市、商工会議所、あらゆる力を綜合して、何年も先の立場にたって、道路問題を解決しなければならぬと思います。

今度の氷害でもまた、砂防ということが問題化されて来っていますが、災害に対する対策というのは、地道でめだちませんが大切なことなんです。

不燃都市の計画も、重要な災害対策でそのポイントなんです。何事によらず、こういった対策に、神戸っ子もっと積極的に協力して、神戸を立派な町にして世界的な水準にもっていくように心掛けたいですね。

それに、神戸の発祥地といっている、兵庫地区の繁栄が立遅れているのは、神戸っ子にとってあまりにも淋しいと思います。

「昔の兵庫」のおもかげを早く取戻してほしいものだと思ふような気持ちなんです……。

— 商工会議所副会頭・阪神内燃機KK社長 —  
(文責小泉康夫)



# FUGETSUDO

フランス風アイスクリーム



ゴーフル



マロングラッセ



中元ご贈答用



コーベピアー

フランス煎餅



創業明治三十年



## 風月堂

神戸元町 - 1 目 TEL ③ 695 696



金 柴田音吉洋服店

神戸・元町通四丁目 ④ 0693

大阪・高麗橋二丁目 ② 2106

私にとって馴染深い滝といえは、華嚴の滝、箕面の滝それに但馬に猿尾の滝などだが、布引の滝はなんといっても一番身近だし、好きな滝の一つである。

布引の滝は、名称どおり、水にしたたった布ですとかけられているといった、なにげない風情が、美しいし手軽くしたしめていいと思う。

特に初夏から、夏にかけて、緑に映る白い布は品がよくて美しく眺められる。

神戸っ子にもっと布引の滝を意識もし、大切にしたいのではないかと思う。

兎に角、市内にある滝など、そんなにあるものではない。私が須磨に移り住んでもう四〇年も経つ、その頃は

## 須磨の浦 森月城

汐見台から見下すと海を一望できて夕暮れどきに、幾十その帆船がちらばって見えて、

須磨の浦の素晴らしい風情に魅せられたものだ。

とくに、須磨で一番いいのは月のある風景だと思う。

「月といえは、須磨」とあい言葉のようにいはれているが、私も須磨の浦の月に日本一と折紙をつけていい。

月見山あたりが一番眺めもよかったのであろうが、もとの須磨離宮から眺めた月は景観だ。

初秋の月の登りかけが一番面白くて、思いがけないところから月が姿を見せる美しくさは、無性にたのしい。

離宮あたりに、謡曲「松風」にある松風・村雨の姉妹の物語の旧蹟が残っているが、

須磨の磯辺を歩くと、月夜に汐をくむ、松風・村雨の姿がふとよみがえって来るような気持ちさえする。

須磨の浦は、知らない人がないほど有名だけれども、昔の一番いい、おもかげを残しているのは、現在の海浜公園あたりだと思う。

また砂浜の美しい海岸は多く知っているけれども、須磨の浦の白砂青松は独特で、海の青と砂の白い色彩の調和が美事で、すがすがしい感じがする。

それに海の色は、四季によって色が微妙に変化し、いつの季節でも見飽くことはない。

冬には海が何となく波立って、その波頭がちらちら見え海の色が濁りに自然の威圧を感じるし、春の天気の良い日は、きらめくような、なごやかな美しさがある。

霞がかかって、ぼうとしている海、などは春ならではというところ。初夏から夏、初秋とこれは須磨の一番いいときだし観光のシーズンでもある。とくに夜分の美しさをもっと強調していいと思う。

先年、米国のブセッティという日本画の研究家を案内して、須磨の観光ハウスから月見をしたら、非常に感激して、日本の月では最高だといって動かない、京都の月もいいけれど、本当の月の素晴らしさはこの須磨に尽きるという程の執心ぶりであった。

須磨、明石の風致は毎年こはされつつあるが、出来れば、須磨の月夜を楽しめるように工夫してほしいものだと思う。

これは、時代の要求で仕方のないことなのだから、手の入れるとき十分の注意がほしい、そしてそこにまた別の美しさが現れたりするものだ。例えば鉢伏山頂から見下ろす、須磨、明石、淡路などの美しさはまた別の意味で、美しいし、美磨離宮に噴水をあげる計画があるそうだが、こんなたのしい計画はきっと成功するだろう。その新しく生れて来る美しくしさを楽しみに待つことが出来るというものだ。

(日本画家)